

〔研究ノート〕

情報メディアとしての本

— ハングルで書かれた子どもの本と電子書籍を通して —

A Study of “Book” as Information Media
Through Korean Digital Books and Children Books in Korean

村主千賀*

Chika MURANUSHI

キーワード：ブックフェア、大型本、電子書籍、出版、図書、ハングル

Key words : Book fair, Big book, digital book, publishing, book, Hangul, Korean alphabet

要約

本研究は、韓国パジュ市で開催されたブックフェアと韓国における出版の現状について議論し報告するものである。子どもと本の関係、読み聞かせの意義の考察から、リテラシーの獲得と読書の関係は、個人的なプロセスと歴史的なプロセスとが似ていることが指摘できる。また電子書籍については、ハングルの特性に注目し、本を情報メディアとしてとらえる手がかりを引き出すことができた。

Abstract

This paper discusses the Korean book fair “PAJU BOOK SORI” at PAJU Book City and the state of the art of book publishing in South Korea. Some exhibitions and events at the book fair emphasize the importance of the relationship between children and books. The discussion suggests the similarity between the act of reading books and being read to, and the process of personal and historical literacy developments. Through further examinations, some suggestions are made on digital books and the “book as information media”, especially digital typing in Hangul (Korean alphabet) as a bridge between orality and literacy.

* 東海学園大学人文学部人文学科

1. はじめに

電子書籍元年といわれて早三年が経過した。これまでに米国 Amazon では電子書籍の売り上げが「紙の書籍」の売り上げを超えた^[1]。電子書籍に対する議論は多岐に渡る。小泉らは電子書籍に関して「課題」「端末」「出版」「コンテンツ」「市場」について多く論じられていると明らかにした（小泉公乃ほか 2012 年）。また毎日新聞による「第 66 回読書世論調査」（毎日新聞社 2012 年）で電子書籍の読書経験を問う質問がなされた。この調査で電子書籍を「読んだ」と答えた人は 14%であった。この結果は、新聞の見出しで強調されるなど、話題としては注目されたが、調査そのものは、読書行為そのものに踏み込んだ検討をするものではない。いずれも「紙の本」対「電子書籍」という議論の構図から抜け出せていない。一方、各国の大小の図書館ではいかに電子書籍をサービスに取り入れていくか試行錯誤が行われ、いくつかの取り組みはしばしば大きなニュースとなって取り上げられている。

「電子書籍」という新しいメディアの出現。人々の関心の高さと、社会の対応。このような現象に対して、「革命」といった刺激的な呼称が与えられようとしている、あるいはすでにそう決めつけているものもある。しかし、これをもって、近代社会を生み出したとまで称されるグーテンベルク革命に比肩するものと言えるのだろうか。

筆者は電子書籍に対する紙の本という捉え方で二者を対立関係に置こうというのではなく、「本」がどのような存在で、人の生活の中で如何にあるのかということを見ていきたいと思う。なお、図書は、文脈によって書物、書籍、本と表記されるが、包括的な用語として含みを期待できるため本という語を用いる。

2. 本研究のアプローチ

本研究では、韓国の坡州出版都市とブックフェア（バジュブックソリ 2013 年 9 月 28 日～10 月 6 日開催）の取材内容を報告する。それとともに、韓国の出版の現状の一端に触れながら、本と人の関わりとその捉え方を考察する。韓国を対象として取り上げるのは以下の理由による。まず本を取り巻く外的環境として、IT 大国と呼ばれ先進的な電子情報環境であること、人材育成こそ国家の発展の基盤と考え、人材育成には読書は欠かせないものとして、国家政策によって読書文化と出版文化の振興に熱心に取り組んでいること、世界でも例のない出版都市を形成していることがあげられる。また世界最古とされる古活字本の製作地である朝鮮半島は印刷史、図書史の観点からは非常に重要な場所である^[2]。さらに、ハングルという独自の文字文化を有することから、ハングルに注目することで、異なる視点から本を見ることができる。これらのことから、韓国の出版文化に注目することは、情報メディアとしての本を考える際の貢献があると期待される。

3. 韓国の出版の状況

3.1 韓国におけるブックフェア

韓国においては1995年よりソウルにて「ソウル国際図書展」が開催されている^[3]。ソウル国際図書展では、毎年主賓国を設定し、「国際的な」ブックフェアを意識したものとなっている。一方で人を集めるための「本の割引販売会にすぎない」というような批判もあるが国際展示場で開催されるようになって、出展数、来場者数とも相当な規模であり、国内外の出版文化への貢献度は大きいと言える。

電子書籍元年といわれた2010年以降、本図書展は以下のようなキャッチフレーズを掲げた。

- 2010年 책과 통하는 미래 미래와 통하는 책 (本と通じる未来 未来と通じる本)
- 2011년 책은 미래를 보는 천 개의 눈 (本は未来を見る千の目)
- 2012년 책을 펼치면 미래가 보인다 (本を広げれば未来が見える)
- 2013년 책 사람 그리고 미래 (本、人、そして未来)

これらから見てとれるのは、本は人をつなぐもの、未来へと繋がるものと位置づける姿勢である。

もう一つ、大規模なブックフェアが京畿道坡州市で開催されている。開催地となる坡州出版都市とは、国家産業団地の指定を受け、出版社だけでなく、印刷会社、出版流通会社、紙類流通会社、製本関連会社などから成る出版関連の産業団地である。単なる産業団地を意図するのではなく、「一冊の大きくて美しい本」を編集作業するかのような街作り」を目指して発展してきた。その出版都市で、2011年より毎年本の祝祭とも呼ばれるブックフェア「パジュ 本の声 (과주북소리パジュブックソリ)」(以下ブックソリと表記)が開催されている。また、2003年より「パジュ子どもの本ハンマダン (과주 어린이 책 한마당 パジュオリニチェックハンマダン)」として始まった子どもの本のブックフェアは、現在「子どもの本の展示 (과주 어린이 책 전시 파주オリニ체크쵸ン치)」として2013年まで続いている。また、坡州出版都市は本を生産する空間から本の文化を共有する空間への変化をキャッチフレーズとして「本屋町 (책방거리 체크パンкори)」助成をはじめた。坡州出版都市は、多様な行事や助成活動を通じて、本と人の関わりを常に意識させるような発信を続けている^[4]。

3.2 坡州出版都市の「紙の本」に対する取り組み

「知恵の森 (지혜의 숲 ジヘエスブ)」とは、坡州出版都市において、24時間開館の図書館を作ろうというプロジェクトである^[5]。出版都市内にある研修宿泊施設である「紙々郷 (지지향 ジジハン)」において、寄贈によって蔵書を構築し、人文学図書館を開設しようというものである。その趣意書では出版社に対し、返本された本を廃棄処分せず提供するよう呼びかけている。また人々に生涯をかけて読まれてきた本は文化的・精神的な遺産であるとし、寄贈者の学問と精神がこもった蔵書を、後学者たちが読んで体験できるようにしたいと述べている。このプロジェクトについて

て、例えば“大学教授は退職時に大学図書館へその蔵書を寄贈したのは昔日のことであり、いまや本の所蔵スペース不足は深刻で、捨てるしかないが、その有効なりサイクル場所を得た”と評価されている（경향신문 2013）。置き場のなくなった「紙の本」がただ捨てられるのではなく、後学へ引き継いでいく「財産としての蔵書」と見る「本」への意識を見ることができる。

3.3 ブックソリに見られるこどもと本の関わり

ブックソリでは多様な展示、行事が催された。以下ではプログラムの例を見ていくこととする。

京義道図書館と京義道サイバー図書館による展示では出展者は「Big-Book 片手を超える本 (빅북 한 손 너머의 책 ビックブックハンソンノモエチュク)」を通じて、子どもたちへの読み聞かせの重要性を示した。Big Book（以下大型本とする）による読み聞かせは、普通の大きさの本よりも、より多くの子どもを対象にし、好奇心をもって本を読む声に耳を傾けることを促すことができると述べている。海外では子どもの本を出版する際、図書館での読み聞かせ用大型本が制作される。それに対して、読み聞かせと大型本の効果が認識されながらも、韓国にこのモデルはなかったことから、以下のプロジェクトが開始された。具体的には、図書館で活用するための読み聞かせ用大型本を作るということである。京義道は1億ウォンの予算を組み大型本を制作するプロジェクトを支援した。このプロジェクトで制作された大型本は京義道の市・郡の中央図書館に1式ずつ配布され、子どもたちのための読み聞かせプログラムなどに供用されている。また、来館が難しい子どものもとへは、専門教育をうけた者が出かけて行き読み聞かせを行うようになっている。

ブックアートの展示では、子どもを主体とした体験型のブースが多く出展された。これは、2011年取材時のソウル国際ブックフェアでのアートブックコーナーとは趣がことなっていた。ソウル国際図書展では、アーティストや、芸術を専攻する学生達の出展が目立ち、出展者の自己表現の場でもあったのに対して、ブックソリは子どもの参加型、体験型ということで「共有空間」のコンセプトがより強く出ていると言える。

ある原画の展示企画では、QRコードを利用して、絵を見ながらスマート端末で、音の世界を楽しむことができるようにするなど、本の世界に興味をもち、より身近に感じさせるものとなっていた^[6]。端末機器を使用する仕掛けを使うのであれば、絵本そのものを電子書籍化すればよいという発想はできるが、やはり人の声で読み聞かせる距離感を考えれば、絵本は「紙の本」でなくてはならないというニーズが見いだせる。

「こどもに本を」という意識は、「知識の市場 (지식의 난장 ジシゲナンジャン)」として出版都市内の各社が開放したショップスペース、フリーマーケット、展示をはじめとする企画において顕著に見られた。多様な絵本や小学生向けの読み物、学習教材が多く供されており、特に絵本は手に取りやすく、絵柄がよくわかるように平積みで販売されることが多かった。

子どもに関連した多様なプログラム展開と、もともと出版都市での大規模なブックフェアが、子どもの本の展示イベントから始まった点を鑑みると、「子どもと本の出会い」は出版都市での行事の核となっていると言える。

さて、次にブックソリにおいてみられたこのような状況の背景となる、より大きな動向をふまえ、その意義を論ずる。

4. 電子化の模索とメディア文化に対する意義

4.1 電子書籍の位置づけ

韓国政府は2010年から2014年までの5年間に総額600億ウォンの予算を投じ、韓国コンテンツ振興院と協力し電子書籍政策を支援する「電子出版産業育成案」を策定し、関連法の改正を推進している。「出版文化産業振興法」は紙の出版が中心となっていたが、電子書籍の増加に対応する改正を進めてきた（연합뉴스 2010年）。電子図書館法や著作権法も改正が進んでいる（白井2009年）。このように電子書籍の出版を支える外的環境は整ってきたと言える。

ブックソリでの電子書籍制作会社のスタッフへのインタビューでは、「韓国において、確かに紙の本が未だ大勢ではあるが、人は新しい機器には慣れるものである。また紙の本では実現不可能な表現を可能にしている点が強調されていけば、市場は見込める」と答えが返ってきた。スタッフは電子書籍の強みの一例として医学教科書のデモを行った。医学分野のテキストでは、ある臓器に関して、その臓器を立体的に表現すること、臓器自身を回転させてその裏側から見ることを可能にする。動き、音、色、形すべての再現性において優れている。プレゼンテーションという面で紙の本では超えられない領域が確かにある。

電子教科書の導入という点では、2011年6月には「スマート教育推進戦略」が発表され、2014年には小・中学校で、2015年には高等学校へ導入する方針が決まっている。韓国の電子教科書の発達、もとは外国語教育の効果的な方法の模索から始まったと言われる^[7]。デジタルであることの強みを活かし、マルチメディアで発音確認しながら会話を学ばせるという実証実験が進められている。文法や読解は紙の本で学ぶことが可能であるが、紙の本からは「音」は出ない。「会話」を学ぶための「本」として電子教科書に着目したのである。

この「音声」と「本」の関わりについて、次章では韓国ならではの文字ハングルに着目して述べていく。

4.2 ハングルで書かれた本を読むということ

耳から入る物語は、特に「子どもに読む本」では、描かれた場面そのものと、手に持ってページを繰っていく作業を見せることまでを前提として、進行していく。そのため、読むものと聞くものの「場の共有」を必要とする。「声の届く範囲」での読書体験を実現させるためには、紙の

本でなくてはならない。ある程度の大きさの保証された絵本や、そもそも読み聞かせを意図した「大型本」はそのためのものである。あたかも、かつてリテラシーが特別な階級のものであり、物語はすべて声でとどけられた時代と同じように。本はいうまでもなく、言葉を記録した物である。文字の読めないものにとっては紙の束にすぎない。ここに、読書と「本」そのものを考察していく鍵がある。

言葉は本来音のシステムであり、物語は声によって聞かせるものであった。ハングルは、音を表す文字である。ハングルで書かれた本を読む行為は一たとえそれが黙読であったとしても一記録の音への還元であるということが、どの言語のどの文字よりも直接的な文字である。つまり、ハングルで表されたそれを読み聞かせることは、文字という二次元へ変換され本という記録物から、物語をまた音へと還元していく作業そのものである。

次章では「読む」対象となる本について、「読まれる」ことがらを書く作業について述べていく。

4.3 ハングルで電子書籍を書くということ

現在、本として読まれるテキストは、ほとんどが印刷による文字の連なりであり、それを人は「活字」と呼ぶ。実際には、最近ではいわゆる金属活字を用いて印刷することは少なく、電子的な入力によって印刷用の版が作られている。

コンピュータの発展において、いわゆる CJK 問題、中国語、日本語、韓国語は非アルファベット表記であること、縦書き文化を有することからデジタルテキスト化にハンデを負ってきた。特にハングルは音素記号の組み合わせによって文字が成り立つため、入力、表記方法が独特である。しかしながら韓国における IT 産業は、非アルファベットを克服するばかりか、電子機器の世界では目覚ましい発展を遂げてきた。3D 絵本など画期的な電子書籍などはもちろん大変興味深いが、メディアをとらえる視点からは、ハングルに着眼することで別の意義を見いだすことができる。

活字は、一本ずつが予め完成した一文字を成すが、手で書く際には、ハングルの場合は音素記号を組み合わせる作業になる。このハングルを書く作業そのものを機械化する際、タイプライターでは非常に困難を伴った。ワープロの登場で解決するのであるが、記号を組み合わせるといふ成り立ちから、入力する際には、一つの音素記号が次に入ることによって、一度入っている文字の形（大きさと位置）が変わっていく。母音と子音、さらに子音が1つないし2つ加わることもある。手書きで文字を書くときには、半ば無意識に組み合わせ方によって文字を整えて、1文字を作り出す。そのまま印刷される文字列という点で、コンピュータのキーボード入力という行為は、むしろ手書きに近い。ハングルは口の形を表す記号である。とはいえ、厳密に口の形をかたどった絵文字ではない。その記号は、一度習得してしまえば文字を見れば発話運動に直ちに

むすびつく、発音運動をなぞるような形である。ハングルは、本と声の文化を緊密につなげていく。それは、文字を印刷するという点において、一旦は、活字という金属の小さな棒に封じ込めてしまった音としての「プロセス」を解き放つ行為ととらえることができるのである。

4.4 メディア文化の変容の可能性

電子化によって、「本」が改めてメディアとして意識されるようになった。電子化は、紙媒体を支配してきた印刷言語の特性から本を解放する。

この電子化による変容は、韓国特有の、ハングル特有のことではない。電子メディアの議論でしばしば指摘されてきている。その中で、とりわけ柔軟に自然に流れに乗っているように見えるのは、ハングルという文字特性を伴う情報メディアの内的環境と、出版や読書に関連する政策や多様なイベントなどの外的環境が要因とされるであろう。いずれ、遅かれ早かれ、この流れは他の出版文化圏へも浸透していくであろう。

そもそも、情報メディアとしての本は、手書きから活字印刷へ、活字印刷本から電子書籍へという直線上の戻れない進化をしているのではないと考える。技術革新は進歩や上位の文明と位置づけるのではなく、より人間指向な技術の獲得ととらえるべきであろう。歴史の中で、著者の書き記した文字は活字という金属棒のセットへ固定された。そして再び「入力する」という行為によって著者は自ら書いた言葉をそのまま本へ込めるということが可能になった。こどもが、リテラシーを獲得し人格を形成していく過程では、本は読み聞かされるものである。成長につれ、黙読という読書行為を獲得していく。それは、本自身の在り方の歴史の変遷と似ている。大衆がリテラシーを持たなかった時代には、ほとんどの人にとって、本の内容は「聞かせられるもの」であったのが、誰もが文字を読むようになった後は、誰かが代表して声に出して読むものではなくっていった。誰もが入手でき、片手で持てる本は「個」の空間での学習と黙読のために用いられる。黙読してきた本が、タブレットという舞台装置を得たとき、インターネットを通じて同時的に音と空間、体験と知識の共有を実現する。それはあたかも聖堂で、広場で「知識を共有する場」に同時に存在したように。

5. おわりに

今回は韓国のメディアと出版状況の一側面を概観しながら、本と人の関わり、情報メディアとしての本を考察してきた。今後はこれを手がかりに技術革新のもたらす影響、言語と文字の特性に注目して「本」の在り方を探っていく。さらに、読書振興政策や、多様な図書館で企画・運用される具体的なプログラムやサービスの展開など、「本」を取り巻く外環境を検証しつつ、本と出版、そして図書館の関わり方の行く末を考察していくことにする。

尚、本研究は東海学園大学人文学部申請研究費の助成をうけて韓国京義道坡州市に位置する坡

州出版都市および「파주북소리」(2013年9月28日～10月6日開催)の取材に基づくものである。

注

- [1] <http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1101/28/news032.html>
- [2] 現存する金属活字本の最古のものは清州興徳寺において制作された「直指」であり、ユネスコ世界遺産に登録されている。ゲーテンベルクの42行聖書より70年ほど早く制作された。「直指」の現物はフランス国立図書館が所蔵。また海印寺に納められている八万大蔵経の版木は印刷史の観点から重要である。
- [3] ソウル国際図書展 1974年に開かれた教育展覧会を大韓民国の図書展示会の嚆矢とし、1974年には国権回復50周年を記念して国際図書展へと規模を拡大した。1991年より「ソウル図書展」という別称を使うようになり、1995年より「ソウル国際図書展」として毎年開催されている。2012年は参加国20カ国、71ブース、580社 来場者数126,799名
<http://www.sibf.or.kr/introduction/index.htm> 筆者は2010年に参加、見学した。
- [4] 坡州出版都市の紹介 http://www.pajubfc.org/festival/m01_introduce.asp
およびパンフレット「坡州出版都市訪問客のためのご案内書」を参照した。
坡州子どもの本の展示 <http://pajubookcity.org/jijihyang/>を参照した。
- [5] 「知識の森」プロジェクト パンフレットを参照した。
- [6] ブックソリの展示イベント 길벗어린이社の「見て聞く絵本 原画展示」にて昔話の「へっこき娘」の絵本原画の展示。原画のキャプションにQRコードを表示し、場面に合わせた音の世界を楽しむ仕掛けがしてある。
- [7] <http://resemom.jp/article/2011/08/17/3799.html>
ReseMam 2011年8月17日 韓国IT教育事情-7

引用文献

- 小泉公乃ほか(2012)「日本において電子書籍はどのように論じられてきたか：雑誌記事と新聞記事の内容分析による論点の整理」Library and Information Science No.68, p.1-22 三田図書館・情報学会
- 白井京(2009)「韓国の電子図書館法「IT 大国」の図書館法と著作権法」外国の立法 No.242, p.87-107 国立国会図書館調査および立法考査局
- 毎日新聞社編(2012) 読書世論調査 2013年版 毎日新聞社
- 경향신문 The Kyunghyang Shinmun 2013年10月27日記事 "100만권 갖춘 도서관 열겠다"
파주출판도시 '지혜의 숲' 프로젝트 진행 「100万冊を持つ図書館が開かれる」パジュ出版都市「知恵の森」プロジェクト 紹介記事 http://news.khan.co.kr/kh_news/
- 연합뉴스 2010年4月26日記事「電子出版業に活力、政府が年間1万件製作支援へ」
<http://app.yonhapnews.co.kr/>